

大豆管理情報 (第4号)

令和6年8月20日
農業技術課 広域普及指導センター

1 気象経過 (図1)

(1) 気温

5月下旬の平均気温は、18.4℃ (対平年差-0.6℃) と平年に比べ低かった。
6月の平均気温は、23.2℃ (同+1.8℃) と平年に比べかなり高かった。
7月の平均気温は、27.8℃ (同+2.3℃) と平年に比べかなり高かった。
8月1～3半旬の平均気温は、28.4℃ (同+0.9℃) と平年に比べ高かった。

(2) 降水量

5月下旬の降水量は、133.0mm (対平年比 368%) と平年に比べかなり多かった。
6月の降水量は、150.0mm (同87%) と平年並であった。
7月の降水量は、265.0mm (同108%) と平年並であった。
8月1～3半旬の降水量は、10.5mm (同12%) と平年に比べ少なかった。

(3) 全天日射量

5月下旬の平均全天日射量は、16.6MJ/m²/日 (対平年比 86%) と平年に比べ少なかった。
6月の平均全天日射量は、20.3MJ/m²/日 (同 117%) と平年に比べかなり多かった。
7月の平均全天日射量は、17.3MJ/m²/日 (同 104%) と平年並であった。
8月1～3半旬の平均全天日射量は、22.7MJ/m²/日 (同 121%) と平年に比べかなり多かった。

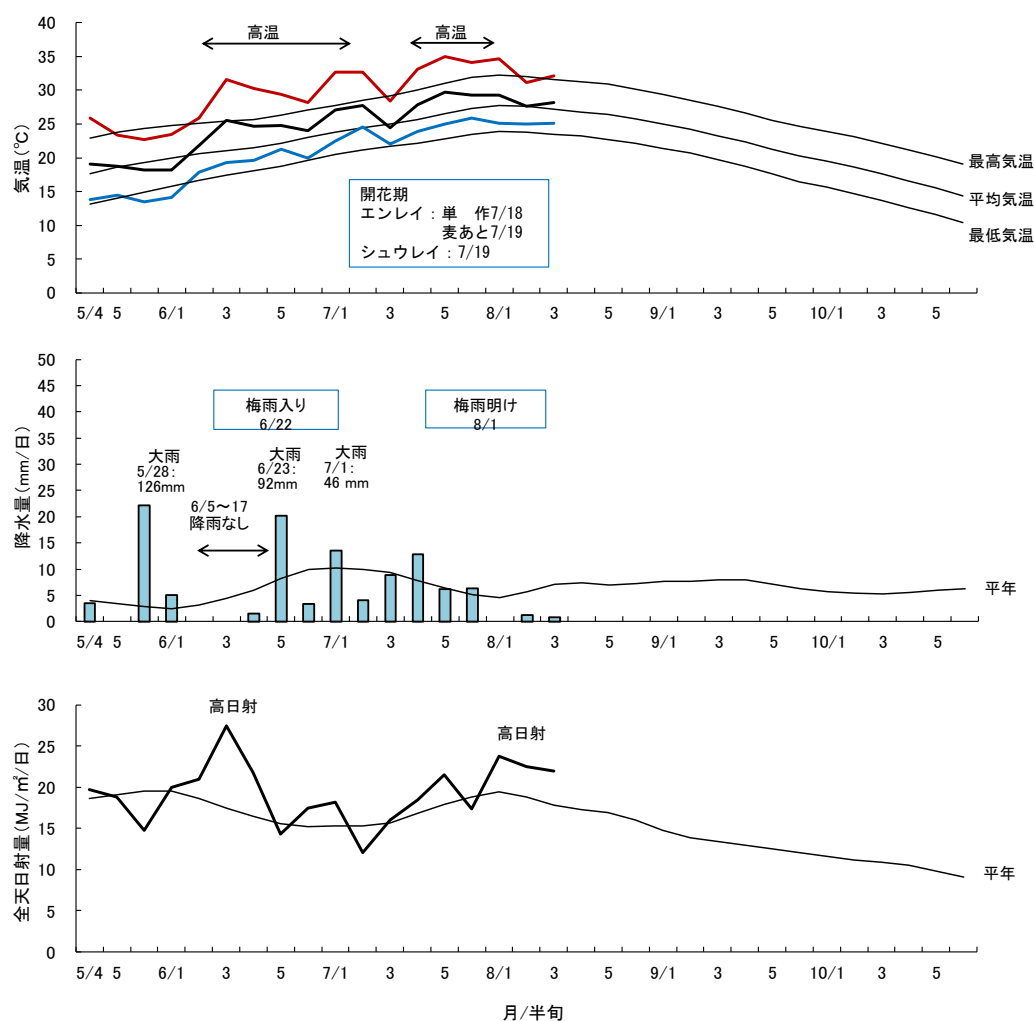


図1 令和6年の気象経過 (富山地方気象台)

2 生育経過（生育観測ほデータ）

(1) エンレイ（単作）

平年に比べ、主茎長はやや短く、本葉葉数は0.4葉少なく、一次分枝数は0.2本多くなっている。

(2) エンレイ（麦あと）

平年に比べ、主茎長はやや短く、本葉葉数は0.1葉少なく、一次分枝数は0.4本多くなっている。

(3) シュウレイ

平年に比べ、主茎長、一次分枝数は並で、本葉葉数は0.4葉少なくなっている。

表1 大豆生育観測ほ調査結果（8月20日調査）

品種	年次	播種日 (月日)	栽植本数 (本/m ²)	主茎長 (cm)	本葉葉数 (葉)	一次分枝数 (本)	開花期 (月日)	
エンレイ	単作	R6	6月5日	17.7	70.6	12.4	2.8	7月18日
		R5	6月7日	17.4	73.1	12.9	2.3	7月22日
		平年	5月31日	16.5	74.7	12.8	2.6	7月18日
	平年比・差	5	107	94	-0.4	0.2	0	
	麦あと	R6	6月7日	16.4	64.1	12.1	3.2	7月19日
R5		6月5日	16.5	66.9	12.3	2.8	7月19日	
平年		6月6日	16.8	70.6	12.2	2.8	7月22日	
平年比・差		1	97	91	-0.1	0.4	-3	
シュウレイ	R6	6月7日	12.4	66.5	11.9	3.5	7月19日	
	R5	6月11日	13.0	57.6	11.9	3.7	7月24日	
	平年	6月6日	15.2	66.4	12.3	3.5	7月23日	
	平年比・差	1	81	100	-0.4	0.0	-4	

注1) 調査ほ場数: エンレイ(単作5、麦あと3)、シュウレイ(単作3)

注2) 平年値はH26~R5

注3) 平年比(差): 栽植本数、主茎長は平年比、播種日、本葉葉数、一次分枝数、開花期は平年差

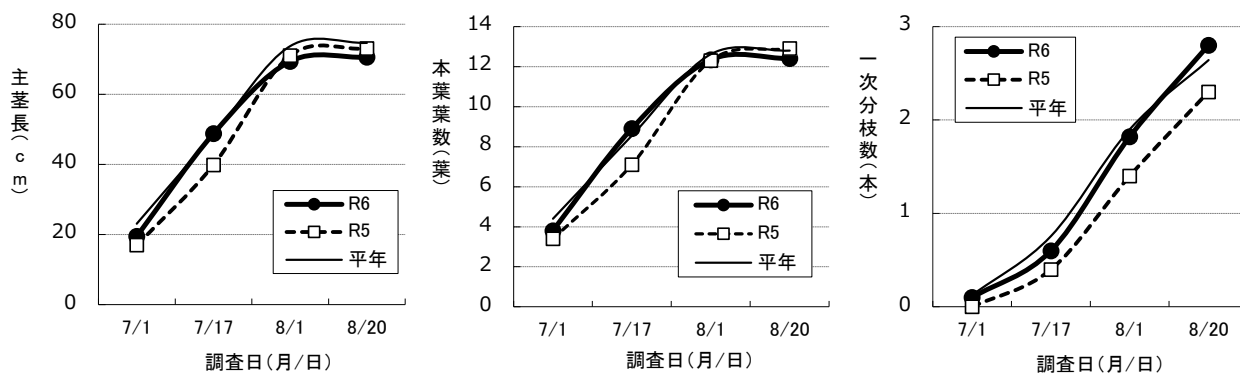


図2 単作エンレイの生育経過

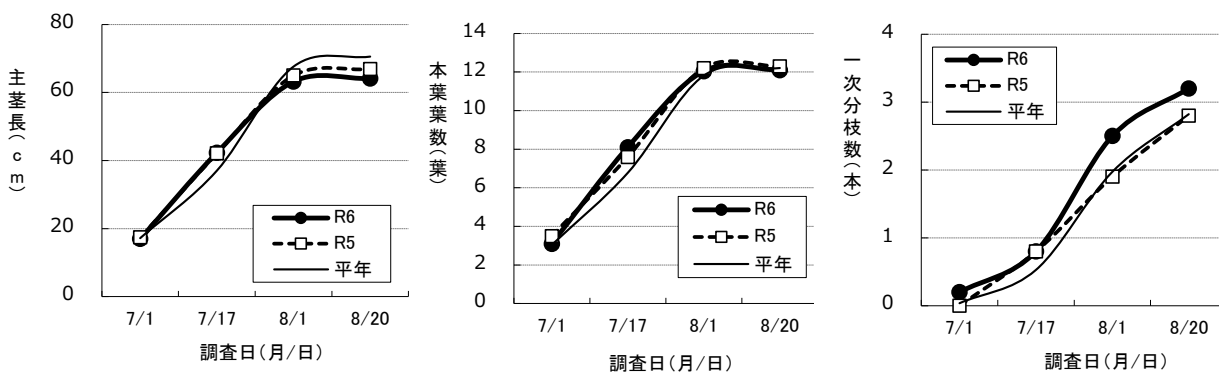


図3 麦あとエンレイの生育経過

3 当面の技術対策

- ・降雨後の排水や畦間かん水の入排水を速やかに行うため、再度、溝の連結や排水口の掘下げを実施する。
- ・水分が最も必要な子実肥大期を迎えているため、晴天が3日以上続くと見込まれる場合は、降雨に頼らず積極的に畦間かん水を実施する。
- ・吸実性カメムシ類が多発していることから、2回の基本防除(紫斑病およびカメムシ類)を徹底する。なお、常発地域や2回の基本防除後に発生が多くみられる場合は、9月上旬に追加防除を実施する。

(1) 排水対策

降雨後の排水や畦間かん水の入排水を速やかに行うため、再度、溝の連結や排水口の掘下げを実施する。

(2) 畦間かん水

- ・9月上旬頃まで晴天が3日以上続くと見込まれる場合は、降雨に頼らず積極的に畦間かん水を行い、落莢の防止による莢数の確保と青立ちの発生防止、百粒重の確保や被害粒の発生防止を図る。
- ・かん水は短時間で実施し、ほ場全体に水が行き渡ったら、水口をしっかり止め速やかに排水する。
- ・かん水を行う際は、下流域まで十分に水が行き渡るよう地域内で調整し、効率的かつ計画的な用水の利用が行われるよう配慮する。



しわ粒 (陥没)



莢ずれによる汚損
(検査上は褐斑粒扱い)

写真1 子実肥大期の水不足や高温で発生しやすい被害粒

(3) 病虫害防除 吸実性カメムシ類：7月30日注意報発表

【基本防除】

- ・吸実性カメムシ類の発生状況は、8月7日現在で0.57頭と平年(0.09頭)より多くなっている(農研定点調査)。子実肥大期の加害は被害粒の増加や子実の肥大停止により青立ちの発生につながるため、紫斑病とカメムシ類に対して、2回の基本防除(8月2～3半旬頃と4～5半旬頃)を徹底する。
- ・同一系統の薬剤の連用は避け、莢や茎葉に薬剤が十分かかるように散布する。

【随時防除】

ア 吸実性カメムシ類 (写真2、3)

- ・山際等の常発地域や2回の基本防除後に発生が多くみられる場合は、9月上旬に追加防除を実施する。



ホソヘリカメムシ



イチモンジカメムシ

写真2 大豆を加害する主なカメムシ



写真3 カメムシ類の吸汁被害

イ ハスモンヨトウ（写真4、5）

- ・若齢幼虫による白変葉被害がみられたら、速やかに被害葉を取り除き、ほ場外で処分するとともに、発生状況に応じて薬剤を散布する。なお、防除の際は葉裏にも薬剤が十分かかるように散布する。



写真4 若齢幼虫による白変葉被害



写真5 葉裏にいる分散前の若齢幼虫

ウ 葉焼病（写真6）

- ・強風雨でまん延し、多発すると収量、品質の低下につながる。
- ・今年は発病しているほ場が多いため、9月上旬頃まで台風等の強風雨による葉の破損が予想される場合は、その直前又は直後に「Zボルドー」等で防除する。



写真6 葉焼病

（4）雑草対策

- ・ほ場内の大型雑草や難防除雑草は、雑草が結実する前に防除（除草剤塗布、地際からの刈取り等）を徹底する。
- ・イヌホオズキ類の液果は汚損粒の原因となるため確実に防除する。



写真7 大型雑草
（イチビ）



写真8 イヌホオズキ
の液果